

韓国における陸上競技の普及施策に関する研究 ～世界選手権 2011 年韓国大邱大会にむけて～

トップスポーツマネジメントコース
5007A305-1 伊東浩司

研究指導教員： 平田竹男教授

2011 年に韓国の大邱で、陸上競技の世界選手権が行われる。韓国は、自国開催の 1988 年ソウル五輪では、戦後に開催された五輪の歴史の中で唯一、開催国が陸上競技でメダルを獲得することが出来ず、メインスタジアムに自国国旗を飾ることが出来なかった。1979 年のメキシコ・ユニバーシアードで徐末九選手が樹立した m10 秒 34 の韓国記録は 29 年たった現在でも、0, 01 秒たりとも更新されていない。また、世界選手権においても、2001 年エドモント大会から 4 大会連続で入賞者が出ていない。このように、韓国陸上競技界における競技自体が停滞しており、競技成績を残すことが出来ていないという状況である。そのような中で、2011 年に世界選手権を成功させる為にも、また、同じ東アジアの国であり、同じ黄色人種である韓国の陸上競技が発展することによって、東アジア全体での陸上競技の発展につなげるためにも、本研究においては韓国陸上競技界における課題を抽出し、その改善策を提示することを目的とした。韓国陸上競技界の課題を抽出するために、まず、競技成績のデータやテレビ視聴率などから、韓国陸上競技界の競技レベルと人気の現状について検証を行った。韓国陸上競技界の現状に関しては、アジア競技大会の獲得メダル数は、1986 年自国開催のソウルアジア競技大会で獲得した 12 個のメダルが最高で、前回 2006 年カタール大会では、獲得したメダル数はわずか 4 個の状態であった。短距離の個人種目に関しては、1994 年孫選手の 400m2 位以降メダルは獲得していなかった。また、陸上競技の人気については、競技人口が少なく、特に大学生の登録校が減少していた。そのような背景から、韓国陸上競技の人気は低迷し、2007 年の世界選手権大阪大会の平均視聴率は 1%にも満たないほどであった。

次に、現在の韓国陸上競技界を検証するにあたって、インタビュー形式で、大韓陸上競技連盟、高等学校、大学校、実業団チーム、スポーツメーカーの関係者からインタビュー調査を行った。また、観察調査から実際に行われている大学生のトレーニング方法などを観察した。

大韓陸上競技連盟は、2011 年の大邱世界選手権において、10 種目で決勝に進出することを目標としている。しかしながら、2007 年の大阪世界選手権には、マラソンを除くと 6 名しか参加が出来ていない。大韓陸上競技連盟が考える「普及」への取り組みは、少数精鋭の強化システムの中でトップスターを作ることが「普及」に繋がるという考え方であり、日本のような底辺拡大に取り組むことには否定的であった。

実際の現場を見ると、高等学校の場合、選手が高い志を持って努力しているが、韓国で陸上競技は人気がなく、「つらい」、「練習量が多いなど」でイメージが悪いようであった。そのようなことから、サッカーなどの人気スポーツに優秀な人材が流れているという問題があることがわかった。実業団の場合、世界を目指すには、年間の試合スケジュールが国際陸上競技連盟のスケジュールの流れと異なっていることが問題であった。また、五輪や世界選手権などの代表選考の基準がわかりにくく、国内最高峰の大韓選手権も無条件で出場することが出来るといった状況であるため、進学、就職、契約更新の内容に直接重要視されている全国体育大会と種目別選手権が韓国選手権よりも重要視されてしまっているという問題点があることもわかった。また、トレーニングに対する考えが固定化されており、科学的な理論があまり取り入れられておらず、精神論を全面に押し出したトレーニングを行っていたり、鍛える箇所や競技動作のポイントが違うなど、古い理論が未だに残っているため、競技力の向上に繋がらないのではないかと感じた。スポーツビジネスにおける成功要因として、「勝利」「普及」「市場」の 3 つの観点を「トリプルミッション」として提言している。この「トリプルミッション」で韓国陸上競技界の現状をみると、「勝利」に関しては、競技力停滞のため競技の知名度や関心があがらず、競技者の増加、指導者の質が向上せず、視聴者も増えなかった。そのため「普及」に繋がらなかった。繋がらないことで、収入が増えず「市場」は拡大せず、「勝利」にむけての投資も出来ず、予算も減少していた。「勝利」「普及」「市場」の 3 つのミッションが全く循環されていないため「トリプルミッション」が成立出来ない状況であることがわかった。

以上のことをふまえて、開催まであと 4 年をきった世界選手権大邱大会を成功させる為に、現地での聞き取り調査と公開されている統計調査から、課題を抽出してきた。

その改善ポイントは、次のとおりである。

大韓陸上競技連盟では、少数精鋭のエリート育成強化システムを行ってきた。その結果、競技人口が増加せず、関心が上がっていない状況だが、実際の教育の現場では、陸上競技に対して「知る」「見る」「触れる」というジュニア層の普及・強化をする環境は多く存在する。このジュニア層を有効に取り込む普及・強化のシステム改革を行う必要がある。また、2011 年にむけてのリレー強化に関しても、強化対象者の幅を広げ、競争力の向上など活性化が必要だと

感じた。

勝利に関しては、筆者の理論をはじめ、世界の陸上競技に対するデータなどを取り入れ、科学的なトレーニングも取り入れていければ競技力向上も十分可能だと思う。

大邱世界選手権にむけて、現状の競技水準、競技人気では、世界選手権の盛り上がりは難しいと思われる。選手の本番での活躍は、本人の競技力も必要であるが、それ以上に競技場、テレビでの観戦人数

がどれだけ増えるかで大きく変わってくる。そこで、見るサイドの人口を増やしていく普及活動が急務になってくる。従来の政府や連盟などの世界戦選手権に対する強化・普及への取り組みは重要であるが、マスターズで成功をおさめている ASICS BLUE RUNNERS のような企業中心の活動と様々な陸上競技のトレーニング方法の紹介などをクリニックのような形式で普及アイデアとして供給していくことの必要性を提言する。